

# 一般バーンサイド環のための新たな部分群の族 II

山形大学・理学部 小田 文仁 (Fumihito Oda)  
Faculty of Science, Yamagata University

この報告集の澤辺正人氏の報告 [Sa] の続きとして [OS] の概略を述べる.

## 1 原始べき等元と $\Omega(G, \mathcal{G}_I)$ の単位元 $I_{\mathcal{G}_I}^G$

$\mathcal{D}$  は  $G$  の部分群族 ([Sa, Section 1]) とする.

やや唐突ではあるが, 圏論的な  $((G, \mathcal{D})$ -集合の圏におけるある種の coequalizer の存在に関する) 要請から, 以下のような部分群を準備する. 部分群  $H \leq G$  に対し次のように  $G$  の部分群  $\bar{H}$  を定める:

$$\bar{H} := \begin{cases} \bigcap_{S \in \mathcal{D}(\geq H)} S & \text{if } \mathcal{D}(\geq H) \neq \emptyset, \\ G & \text{if } \mathcal{D}(\geq H) = \emptyset. \end{cases}$$

ただし,  $\mathcal{D}(\geq H)$  は  $D \geq H$  を満たす  $\mathcal{D}$  の元全体の集合とする.  $S \in \mathcal{D}$  に対して, 剰余群  $WS := N_G(S)/S$  の一つの Sylow  $p$ -部分群を  $(WS)_p$  と書く. Yoshida は次のような条件を与えた:

(C)<sub>p</sub>  $S \in \mathcal{D}, gS \in (WS)_p \implies \langle \overline{g} \rangle S \in \mathcal{D}$ .

(C')<sub>p</sub>  $S \in \mathcal{D}, gS \in (WS)_p \implies \langle g \rangle S \in \mathcal{D}$ .

ただし,  $\langle g \rangle S$  は  $S$  と  $g$  で生成される部分群とする. (C')<sub>p</sub>  $\implies$  (C)<sub>p</sub> が成り立つことを注意する. さらに「すべての素数  $p$  に対して (C)<sub>p</sub> が成立すること」と必要十分な以下の条件を与えた:

(C)<sub>∞</sub>  $S \in \mathcal{D}, gS \in WS \implies \langle g \rangle S \in \mathcal{D}$ .

$p$  を素数,  $\mathbb{Z}_{(p)} \subseteq \mathbb{Q}$  を  $p$ -local ring とする. 加法群  $M$  に対し,  $M_{(p)} := \mathbb{Z}_{(p)} \otimes_{\mathbb{Z}} M$  とする. Yoshida の定理は以下の通りである:

**補題 1.** [Yd90, Theorem 3.11] (1) 条件 (C)<sub>p</sub> の下で,  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  は一般バーンサイド環 ([Sa, 定義 2]) である.

(2) 特に条件 (C)<sub>∞</sub> の下で,  $\Omega(G, \mathcal{D})$  は一般バーンサイド環である.

(3) さらに, 素数  $p$  に対し, (1) と (2) で定義される  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  の環構造は一致する.

一般バーンサイド環  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  の原始べき等元を決定するために以下の同値関係を定義する.

**同値関係  $\sim_p$ .**  $\mathcal{D}$  に条件 (C)<sub>p</sub> を仮定する. このとき補題 1 より  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  は一般バーンサイド環である. 関係

$$\langle \overline{g} \rangle S \sim_p (S) \quad \text{for } S \in \mathcal{D}, gS \in (WS)_p$$

により生成される  $C(\mathcal{D})$  における同値関係を  $\sim_p$  で表す. 同値関係  $\sim_p$  は  $\mathcal{D}$  に持ち上げられる. 即ち,  $S \sim_p T \iff (S) \sim_p (T)$  とする.

**原始べき等元.** 有理数体の直積  $\mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \tilde{\Omega}(G, \mathcal{D}) = \prod_{(S) \in C(\mathcal{D})} \mathbb{Q}$  は自然な積 (成分ごとの積) で定義される環構造をもつ.  $\mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(G, \mathcal{D})$  はマーク準同型  $1 \otimes \varphi$  を通して,  $\mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \tilde{\Omega}(G, \mathcal{D})$  に同型な

環構造をもつ ([Yd90, Corollary 3.4]). 可換環  $\mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(G, \mathcal{D})$  の原始べき等元の集合はすべての  $S \in \mathcal{D}$  に対して

$$\varphi_S(e_H) = \begin{cases} 1 & \text{if } (S) = (H), \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$

を満たす  $e_H$  ( $(H) \in C(\mathcal{D})$ ) から成る.

部分群族  $\mathcal{D}$  に条件  $(C)_p$  を仮定する. 部分群  $Q \in \mathcal{D}$  に対し, べき等元の和  $\sum e_H$  (ただし  $e_H \in \mathbb{Q} \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(G, \mathcal{D})$ ,  $(H) \in C(\mathcal{D})$ ,  $H \sim_p Q$ ) を  $e_Q^p$  で表す ([Yd90, Theorem 4.2]). Yoshida は以下のように  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  のべき等元  $e_Q^p$  ( $Q \in \mathcal{D}$ ) を計算した:

$$e_Q^p = \sum_{(D) \in C(\mathcal{D})} \frac{1}{|WD|} \left( \sum_{H \sim_p Q} \mu_{\mathcal{D}}(D, H) \right) [G/D].$$

**補題 2.** 部分群族  $\mathcal{D}$  に条件  $(C)_p$  を仮定する. 以下が成り立つ.

1. [Yd90, 4.12] 元  $e_Q^p$  は  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  の原始べき等元である. 逆にすべての  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  の原始べき等元はこの形で表すことができる.
2. [Yd90, 4.12]  $\{(Q_1), \dots, (Q_m)\}$  を  $C(\mathcal{D})$  の  $\sim_p$ -同値類のひとつの完全代表系とする. このとき  $\{e_{Q_i}^p\}_{1 \leq i \leq m}$  は  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  のすべての原始べき等元を与える.
3. [Yd90, 5.13] 族  $C_{p'}(\mathcal{D})$  を  $C_{p'}(\mathcal{D}) := \{(Q) \in C(\mathcal{D}) \mid WQ \text{ is a } p'\text{-group}\}$  で定義する.  $C_{p'}(\mathcal{D})$  は  $C(\mathcal{D})$  のひとつの  $\sim_p$ -同値類の完全代表系である. 特に  $\Omega(G, \mathcal{D})_{(p)}$  の単位元は  $\sum_{(Q) \in C_{p'}(\mathcal{D})} e_Q^p$  で与えられる.

以上の準備の下で我々の部分群族  $\mathcal{G}_I$  ([Sa, Section2]) を調べる. [Sa, (SN)], [Sa, 注意1] より  $\Omega(G, \mathcal{G}_I)$  は一般バーンサイド環であった.

**補題 3.**  $\mathcal{G}_I$  に条件  $(H)$  と  $(SN)$  を仮定する. このとき,  $(G_J) \in C(\mathcal{G}_I)$  に対し, 一般バーンサイド環  $\Omega(G, \mathcal{G}_I)$  の原始べき等元  $e_J^p := e_{G_J}^p$  は以下のように表される:

$$e_J^p = \sum_{\emptyset \neq J \subseteq K \subseteq I} \mu_{\mathcal{G}_I}(G_K, G_J) [G/G_K].$$

$(H)$ ,  $(SN)$ , 補題 2 等に注意して原始べき等元  $e_J^p$  の係数, 即ち, メビウス関数の値を決定することにより補題 3 は証明できる.

**定義 1.** 部分群族  $\mathcal{D}$  と単位元をもつ可換環  $R$  に対し,  $R$ -加群  $R \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(G, \mathcal{D})$  は一般バーンサイド環であるとする.  $R \otimes_{\mathbb{Z}} \Omega(G, \mathcal{D})$  の単位元を **Yoshida unit (of  $G$  with respect to  $\mathcal{D}$ )** と呼び  $I_{\mathcal{D}}^G$  で表す.

**例 1.** 部分群族  $\mathcal{D}$  は共通部分をとるという操作で閉じていて,  $G \in \mathcal{D}$  を満たすとする. このとき  $\mathcal{D}$  はすべての素数  $p$  に対して, 条件  $(C)_p$  を満たすことがわかるので補題 1 より  $\Omega(G, \mathcal{D})$  は一般バーンサイド環となる. このとき, Yoshida unit  $I_{\mathcal{D}}^G \in \Omega(G, \mathcal{D})$  は 1-点  $G$ -集合  $[G/G]$  である.

一般に  $I_{\mathcal{D}}^G$  は  $[G/G]$  とはならないことを注意する. たとえば, centric  $p$ -radical 部分群族  $\mathcal{C}_p(G)$  ([Sa06, Section 5]) は共通部分をとるという操作で閉じておらず, かつ,  $G$  を含まないが,  $(C)_p$  を満たすことが知られている (c.f. [Od08]). また,  $\mathcal{G}_I$  も  $\mathcal{C}_p(G)$  と同様にこの性質を満たしている.

**定理 1.** 部分群族  $\mathcal{G}_I$  に (H) と (SN) を仮定する. このとき 一般バーンサイド環  $\Omega(G, \mathcal{G}_I)$  の Yoshida unit  $I_{\mathcal{G}_I}^G$  は以下のように表される:

$$\begin{aligned} I_{\mathcal{G}_I}^G &= \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} \sum_{\emptyset \neq K \subseteq I} \mu_{\mathcal{G}_I}(G_K, G_J)[G/G_K] \\ &= \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} (-1)^{|J|-1}[G/G_J]. \end{aligned}$$

証明は補題 2, 補題 3 より得られる.

## 2 $I_{\mathcal{G}_I}^G$ が与える一般指標 $Y_{\mathcal{G}_I}^G$

この節では, 一般バーンサイド環  $\Omega(G, \mathcal{D})$  の単位元  $I_{\mathcal{D}}^G$  が与える一般指標  $Y_{\mathcal{D}}^G$  を紹介する. 特に, 族  $\mathcal{G}_I$  の場合を調べる.

$\Omega(G, \mathcal{D})$  から  $G$  の複素数体上の指標環への自然な群準同型  $r$  は,  $[X] \in \Omega(G, \mathcal{D})$  に  $G$ -集合  $X$  の置換指標  $r_X$  を対応させる写像を線形に拡張することで与えられる.

**定義 2.** 一般バーンサイド環  $\Omega(G, \mathcal{D})$  の単位元  $I_{\mathcal{D}}^G$  が与える一般指標  $r(I_{\mathcal{D}}^G)$  を **Yoshida character (of  $G$  with respect to  $\mathcal{D}$ )** と呼び  $Y_{\mathcal{D}}^G$  で表す.

定理 1 より,  $G$  の  $\mathcal{G}_I$  に関する Yoshida character  $Y_{\mathcal{G}_I}^G$  は以下のように表される:

**補題 4.** 部分群族  $\mathcal{G}_I$  に (H) と (SN) を仮定する. このとき

$$\begin{aligned} Y_{\mathcal{G}_I}^G &= \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} \sum_{\emptyset \neq K \subseteq I} \mu_{\mathcal{G}_I}(G_K, G_J) \text{Ind}_{G_K}^G \\ &= \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} (-1)^{|J|-1} \text{Ind}_{G_J}^G \end{aligned}$$

が成り立つ. ただし,  $\text{Ind}_{G_J}^G$  は  $G_J$  の自明な指標の  $G$  への誘導指標である.

次の定理は,  $Y_{\mathcal{G}_I}^G$  の  $G$  の単位元  $1_G$  における値が,  $\mathcal{G}_I$  の包含関係に関する単体的複体  $\Delta(\mathcal{G}_I)$  のオイラー標数  $\chi(\Delta(\mathcal{G}_I))$  を与えることを示している.

**定理 2.** 部分群族  $\mathcal{G}_I$  は (H) と (SN) を満たすとする.

1.  $\Delta(\mathcal{G}_I)$  のオイラー標数は以下のように表される:

$$\chi(\Delta(\mathcal{G}_I)) = \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} |G : G_J| \mu_{\mathcal{G}_I}(G, G_J).$$

2.  $Y_{\mathcal{G}_I}^G(1_G) = \chi(\Delta(\mathcal{G}_I))$  が成り立つ.

補題 4, 条件 (H), (SN) を巧みに使いメビウス関数の値を計算することから定理 2 は証明される.

**系 1.** 部分群族  $\mathcal{G}_I$  は (H) と (SN) を満たすとする. このとき次の等式が成立する:

$$\chi(\Delta(\mathcal{G}_I)) = \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} (-1)^{|J|-1} |G : G_J|.$$

**例 2. [Lie type case]**  $G$  をランク  $l$  の Lie 型の有限群とする.  $G$  のひとつの Borel subgroup を含む極大 parabolic subgroups 全体の族を  $\mathcal{G} := \{G_1, G_2, \dots, G_l\}$  とする.  $I = \{1, 2, \dots, l\}$  はインデックス集合である. このとき  $G$  の部分群族  $\mathcal{G}_I = \{xG_F \mid x \in G, \emptyset \neq F \subseteq I\}$  と  $G$  の真の parabolic subgroups 全体は一致すること,  $\mathcal{G}_I$  は **(H)** と **(SN)** を満たすことが分かる. 補題 4 より Yoshida character with respect to  $\mathcal{G}_I$  は以下のように表すことができる:

$$\begin{aligned} Y_{\mathcal{G}_I}^G &= \sum_{\emptyset \neq J \subseteq I} (-1)^{|J|-1} \text{Ind}_{G_J}^G \\ &= \left( \sum_{J \subseteq I} (-1)^{|J|-1} \text{Ind}_{G_J}^G \right) + I_G. \end{aligned}$$

ただし,  $G_\emptyset := G$ ,  $I_G$  は  $G$  の自明な指標とする. 従って,

$$Y_{\mathcal{G}_I}^G - I_G = (-1)^{l-1} \sum_{J \subseteq I} (-1)^{l-|J|} \text{Ind}_{G_J}^G = (-1)^{l-1} \text{St}$$

(ただし  $\text{St} := \sum_{J \subseteq I} (-1)^{l-|J|} \text{Ind}_{G_J}^G$  は  $G$  の Steinberg character (c.f. [Ca85, 6.2.4])) が成り立つ. ゆえに  $Y_{\mathcal{G}_I}^G - I_G$  は St modulo sign で与えられる.

## 参考文献

- [Ca85] R. W. CARTER, Finite Groups of Lie Type: Conjugacy Classes and Complex Characters, *John Wiley and Sons*, (1985).
- [Od08] F. ODA, The generalized Burnside ring with respect to  $p$ -centric subgroups, *J. Algebra* **320** (2008), 3726–3732.
- [OS09] F. ODA AND M. SAWABE, A collection of subgroups for the generalized Burnside ring, *Adv. in Math.* **222** (2009), 307–317.
- [OS] F. ODA AND M. SAWABE, in preparation.
- [Sa06] M. SAWABE, On the reduced Lefschetz module and the centric  $p$ -radical subgroups II, *J. London Math. Soc. (2)* **73** (2006), 126–140.
- [Sa] M. SAWABE, 一般バーンサイド環のための新たな部分群の族 I, 数理解析研究所講究録「有限群のコホモロジー論の研究」.
- [Yd90] T. YOSHIDA, The generalized Burnside ring of a finite group, *Hokkaido Math. J.* **19** (1990), 509–574.